vol. 126
2025 Spring

市民活動情報誌

おうみネット

Collaboration Paper for Voluntary Network in Ohmi

人と社会と未来をしなやかにつなぐ

[特集] 多様化する地域貢献・環境と地域づくりの新しい"カタチ"後編

インタビュー：
滋賀大学
インタビュー：
滋賀県立大学

▶ご紹介はP2

Contents

[特集]多様化する地域貢献・環境と地域づくりの新しい"カタチ" P2～4
人と地域とつながる事業所さん P5
VIVA！日々是好日！ P5
市民活動レポート P6～7
未来塾17期生の虫の目・鳥の目・魚の目 P7
応援インフォメーション P8

Ohmi Network Center
淡海ネットワークセンター
公益財団法人 淡海文化振興財団
https://ohmi-net.com/

特集 未来に 向かって つなげる つづける

多様化する地域貢献・環境と地域づくりの新しい“カタチ”

前号からの連載、特集後編は滋賀大学と滋賀県立大学です。
様々な地域の課題に「若者」がどのように考え向き合っているのか、大学内から大学外へ、滋賀県内から滋賀県外へと枠を越えて「若い力」が育む地域づくりと、新しい発想と気づきから“次の一歩”を踏み出す大学生を取材しました。

Interview

インタビュー：滋賀大学

産学公連携推進機構 地域連携教育推進センター 柴田雅美特命教授
経済学部企業経営学科 中井大翔さん（4年）

『この部屋は “とまり木” 的なところ』

柴田先生のおられる地域連携教育推進センターでは、地域活性化のアイデアを考えたり、学生にボランティア活動を紹介したり、実際にボランティア活動に参加することによって大学で学ぶ専門知識がどのように活かされているのかを知るお手伝いをされています。言わば、「何かをやってみたい」を応援する場所です。また、悩みや困りごとの相談もでき、心を開いて一緒に考える場所でもあります。

1年生の頃、中井さんもそんな場所を訪れたひとりでした。

【中井さんにインタビュー】

“出会い”～先生、先輩、地域～

●地域づくりへのきっかけは？

コロナ禍で「学校にも行けず、何をしているのかわからない」と感じていた頃、柴田先生から「フードバンクひこね」を紹介され、共同代表になったこと、また先輩と一緒に活動した「滋賀大学サスティナビリティ研究会」をきっかけに様々なことに挑戦していきました。一番大きかったのは「先輩の姿」、先輩の一生懸命な姿に惹かれました。

●「大学に入ってから、大学と地域とはどうつながっているのか？」と考え始めたという中井さん。具体的にどのような活動をなさったのですか？

〈もったいないパントリー〉

フードロスが問題視される中、彦根キャンパスを拠点として食品を必要とする人に無料で提供。フードバンクひこねや地元の農家や豆腐店のご協力のもと、出荷不可や賞味期限が近い食材などを提供いただき、学生にも配布しました。今後も引き続き、地域と協力しつつ食品ロスをなくすことを目標に活動していきます。

2021年『滋賀県食品ロス削減優良取組表彰の県知事表彰』を受賞されました！

～柴田先生のコメント～

キャンパスSDGｓ活動として地域連携教育推進センターから小さく始めたものが、学生らの自主活動と連携し、地域に広がる活動になってきました。

大学や大学生が地域社会を構成する一員であることを自覚し、活動したいと思います。

〈ロケットストーブ体験〉

滋賀大学、滋賀県立大学、彦根市赤十字奉仕団、地域が協力して、手作りのロケットストーブで炊き出しパフォーマンスと啓発活動をしました。彦根市赤十字奉仕団の方との交流も良い経験でした。

〈離島生活〉

大学４年生を休学して島根県の離島、海士町に６か月間住み、岩ガキの養殖や冷凍イカの出荷などを経験しました。こだわったところは、“客”ではなく、“島の一員”としての生活。

●離島生活で見えてきたことは?

島には島独自の地域のつながりがあり、島での生活を通して、自分をわかってくれる現場の人や応援してくれる環境がとても大切だと感じました。また、彦根に戻った時「自分の居場所は彦根だ」という確認もできました。

地域を発展させていくには、意志と持続性が必要。一度きりの挑戦では地域は変わらない。積極的に動いて応援してくれた人に応えていきたいです！

●離島での経験を地域へどのように広げていかれたのですか?

彦根東高校で、離島で暮らすことや働くことについての体験談「中井くんに聞いてみよう」のワークショップを開催し、高校生と交流しながら意見交換しました。

大切なことは　“出会いと関係づくり”

●様々な活動をする中で大切だと感じたことは?

“出会いと関係づくり”です。理解ある大人との出会いがとても大切。自分達が不安なところを社会福祉協議会、地域連携教育推進センターなどに助けて頂きました。しっかり関係を作ることで活動もやりやすくなりました。

協働で気づき、築いた見えない価値

●活動を通じて何か変わりましたか?

人と出会うことで価値観が変わり選択肢が広がったと感じています。単に人の上に立つことやお金では満たされないものがある。地域の方々とつながり協働していく中で、「人のために何かしたい」から「皆で何かしたい」に変わりました。地域の方を信頼し思いに共感してもらうこと、正しさだけでは計れないものに価値を見出すことを目指します。

協働のリレー

活動のきっかけとなった「先輩や先生の姿」に、今は中井さん自身が「先輩」となり受け継いでいる…新たな価値とカタチの創造、これからの活動が楽しみです！

Interview

インタビュー：滋賀県立大学
環境科学部 環境政策・計画学科

平岡俊一准教授
笹野陽菜さん（4年）、富田光琉さん（2年）、前川哩子さん（2年）

『答えを探すな、“問題”を探せ』

「世の中の面白い大人達にたくさん出会ってほしい。まずは現場に飛び出す。目を凝らし、耳を澄ませば、今、自分が取り組むべき問題がきっと見えてくるはず。」平岡先生は、自ら興味を抱き様々なことに真正面から挑戦する学生たちに寄り添い、一人ひとりが自分で可能性を広げていく力を後押しされています。

今回お話を伺った3名の学生さん達も、従来の枠に捉われず、自ら新しい世界に足を踏み入れ活動されました。

【笹野さんにインタビュー】

“自分のカラ”を破る!

●どのような活動に参加されましたか?

滋賀県知事より委嘱された「滋賀県地球温暖化防止活動推進員」として、地球温暖化問題や気候変動危機を乗り越えるための啓発イベントや出前講座を県内各地で行いました。出前講座では、フローティングスクールの事前学習として、小学5年生を対象に実施しました。

●参加されたきっかけは?

卒業研究のテーマを探していた時に、平岡先生からこの活動について教えて頂き、取組内容を調べる中で興味がわき、やりがいを見つけられると感じ参加しました。

●活動をする中で苦労されたことは?

しがCO_2ネットゼロムーブメントなど様々な活動にいかに興味を持って貰えるか、特に子ども達に分かりやすく伝えるという面で苦労しました。

●この活動を通じて得たものは?

人脈と責任感です。社会経験豊富な高齢者の皆さんとの“いいご縁”を頂きました。出前講座では小学生から「地球温暖化についてよく理解できた」という声を頂いて、手応えを感じました。肩書があるからこそ、今後も“自分のカラ”を破った活動をしていきます！

地元愛の心

「滋賀の地域をつないでいく“特別なことではない現状維持”で自分の育ってきた滋賀の風土を残していきたい」と言う笹野さん。地元を愛する心が伝わってきました。

【富田さんにインタビュー】

“マイナス”から“プラス”イメージへの転換!

●滋賀県外へと枠を越えた地域活動に参加された富田さん。具体的にどのような活動なのですか?

長崎県五島列島にある奈留島に滞在し、「大学生地域探求奈留プログラム」に取り組みました。

五島市職員と一般社団法人奈留しまなび舎が立ち上げたプロジェクトで、メインは交流です。奈留島外の大学生と奈留島内の住民が交流することで、『人口1,700人、信号機が１箇所、コンビニは１軒もない』奈留島を盛り上げていこうというものです。

●活動する中で見えてきた島の課題は?

海ゴミ問題です。海外から漂流してくるゴミも多く、回収しても毎日漂着するのを見ると嫌になります。島では高齢化が進み、60%が65歳以上。若者は移住者はじめ島外の人ばかり。ゴミ回収をしているのも一部の島の若者有志と行政の方です。

●海ゴミ問題に対して、自分達ができることは?

例えば、漂流してくるトイレの便座やスリッパなど、面白いゴミについて対話するなど、島全体で楽しみながらゴミ回収できる機会やイベントを企画中。海ゴミに対してマイナスイメージは持ってほしくないです！

「2050年には魚よりゴミの方が多くなる!?」

「海ゴミ問題の裏には、国際間の課題や多額の回収費用がかかるなど難題もたくさんある。」と富田さん。「滋賀県の沖島と似た地域環境があり課題があるね。」と平岡先生。この言葉には、奈留島の経験を活かして滋賀県民の宝である豊かな琵琶湖を次世代へ継承していくための新たな挑戦を応援する想いが込められていました。

【前川さんにインタビュー】

“自然と共に成長しあう”

●どのような活動に参加されましたか?

NPO法人アサヒキャンプの活動に学生ボランティアとして参加しました。キャンプを通じ子ども達の自然体験をサポートする活動。ベースキャンプ場は、滋賀県くつきの森にあります。私は、子ども達と関わるスタッフや調理を担当するスタッフのサポートをしました。

●ボランティア活動をしようと思われたきっかけは?

大学生のうちにできるボランティア活動がしたいと考えていた時にこの活動を知り、挑戦しました。子ども達と目線を同じにすることで親元を離れた子ども達と信頼関係を築けるよう意識して関わりました。

●活動の中で一番心に残ったことは?

子どもが成長する姿を見ることが一番心に残りました。最初は輪に入れずひとりぼっちで「私はやらない」と言う子が、気付いたら皆と協力しながら食事の準備をする姿がありとても印象的でした。

“歴史の継承”と“新しい交流のカタチ”

「NPO法人アサヒキャンプは学生ボランティア72期生を迎え、自分もその歴史を継承できる人になりたい。」と言う前川さん。将来、地域文化や遊びや方言を通じて交流し合えるコミュニティカフェをやってみたい！と胸を膨らませておられました。

特集後編は、様々な環境問題や地域課題を「自分ごと」として捉え、若者ならではの“自由な発想”で“主体的に新たなカタチに展開していく姿”をお届けしました。

「つながりは“新たな価値と未来”を生み出す源」、そこには「若者の力」が必要であることを改めて実感する取材でした。

地域で社会貢献

人と地域とつながる事業所さん

「株式会社 アイズケア」 ツバメが作る巣のようにゆっくりと時間をかけて、誰もが集う地域のアンテナに！

彦根を中心に福祉事業を展開されている株式会社アイズケアは、多世代交流のできる場所を目指して最新施設「トガノツバメ」を2024年4月に開設されました。専務の野村隆浩さんと、店主の西田悠人さんにお話を伺いました。

社会全体の問題として、人口減や高齢化で、孤立感や不自由さを抱えている方も増えています。地域で声をかけ、関心を示し、誰かにとって大切な人の未来が福祉という手段を使って、明るく豊かになるように、気軽に地域の方が、福祉の相談が出来る関係を作る。経験豊富なスタッフが提案し、ご本人、ご家族が選択してもらえる。地域の方も、自分ごととして支援の輪に入ってもらいたい。そんな場所になりたい思いで、「お互いに頼り、頼られることで生きる喜びを共に感じたい」と、共生上手なツバメにあやかり、「トガノツバメ」と名付けられたそうです。

最近彦根に、耕作放棄地が増えており、農福連携の就労支援を行っている同社のグループ企業ハニカムファーマーズカンパニーと、就労継続支援B型事業所アースケアテイカーズとが連携し、継承した農園を運営されています。「トガノツバメ」にて、収穫物を販売して地域の方が買いに来られる。小さな循環ができています。今後も農園を増やす予定とのこと、楽しみですね。

そして施設の中心は1Fのデイサービスや、カフェがあります。2Fには居宅介護支援事業所や、シェアスペースもあります。様々な企画が開催され、カフェには農園で収穫された果物が使われて、いつ来ても楽しい空間です。

専務の野村さんは、「介護施設に移り住む時に処分してしまっている大切に使ってこられた家具をお預かりして、次の世代に引き継いでいく。リユースにより、思い出とともに歴史を紡いでいきたい。」と、新しい展開も考えておられます。

最後に店主の西田さんは、「世代や背景に関係なく個と個を大切に、自由にお話してもらって、顔なじみとしての関係を、大事にしています。」と、お話しくださいました。

「トガノツバメ」のスタッフはカジュアルな服装で仕事をしています。皆さんもぜひツバメの扉を開いてみてはいかがでしょうか。

●設立／昭和53年（1978年）　●代表取締役社長／矩（カネ） 規晶（ノリアキ）
●本社所在地／滋賀県彦根市地蔵町73−2
●HP／www.iscare.co.jp
●instagram／@ togano_tsubame

VIVA! 日々是好日!

Vol.3 近江の歴史に思いを馳せて

『VIVA！日々是好日！』として、大津市で活動されている"しなやかシニアの会"さんのメンバーが、滋賀、近江の文学などにまつわるリレーコラムで繋ぐ連載も今回が最終回。ありがとうございました。みなさま、春の近江路で文学の風に吹かれましょう！

文学の舞台へ旧東山道から瀬田の唐橋を歩く

『これやこの　行くも帰るも別れては　知るも知らぬも　逢坂の関』と古くから歌に詠まれた逢坂山を越えると近江の国へ入る。

スマホの現代では、「元気かな。無事だろうか?」と思えば即座に連絡して情報を得ることができるが、往時は逢坂の関で別れた後は、「知るも知らぬも…」とお互いの無事を気遣いながら別れていく。逢坂の関から少し大津側に下った左手にある蝉丸神社からは平家物語の語りが琵琶の音に合せて微かに聞こえて来るようだ。

そこから更に下って道を右折すれば山肌に刻まれた昔の東山道になる。道は途中で山中に消滅しつつも最近は取付道路と呼ばれて復活し、国道1号線や名神高速道路に繋がる重要な生活道路であり、幾多の戦記物語の舞台となった瀬田の唐橋へと繋がる。

東山道沿いの『粟津が原』では、平家物語の中でも最も有名な木曾義仲と乳母子今井兼平の最期の場面が展開された。それから少し山手の国分には芭蕉の滞在した幻住庵があり、幾多の近江の文学の拠点となった。

（しなやかシニアの会　S.Nさん）

Profile しなやかシニアの会

幾つになっても学び、夢を持ち、元気で輝き続けられるように積極的に、楽しく、充実したシニアライフを送ることを目指し幅広く活動中。町家を拠点とし、会員で運営するカフェ"リュエルしなやか"も併せて運営。活動のなかで最近では、近江に伝わる平家物語の研究や、やまと言葉の歴史など文学に関する学びも深めている。
●http://shinayakasenior.life.coocan.jp/

子育て支援

子育てに悩むお母さんたちの味方はベテラン助産師！

おっぱい塾「ははこ」は母乳育児の相談を主に2人のお母さんが20年前から甲賀市で始めた会です。それぞれのご都合で存続が難しくなり相談役として関わっていた助産師の東が引き受け続けています。

出産後に子育ての指導を受ける入院期間はたったの4～5日です。産後の回復で刻々と変わっていく自分の体に戸惑いながら受ける子育ての指導は十分ではなく、退院後に困り果てる方は沢山います。核家族が当たり前の時代です。ご実家が遠方でサポート無しの方も珍しくありません。誰の助けもなく、不慣れな子育てに産後うつになる方も多く、社会問題になっています。

開催当初20年ほど前は母乳育児相談で利用される方が多かったのですが、最近は子育て全般に及ぶようになってきています。授乳方法やミルクの足し方と言った母乳関係も有るのですが、抱っこの仕方、寝かしつける方法、衣服の枚数、冷暖房の使い方、スキンケア、児との遊び方、離乳食の始める時期から進め方と多岐にわたっています。専門の助産師が対応していますが、参加者のお母さん同士で経験談を話し合って解決される事もあり、お母さん同士の交流の場にもなっています。昨年初めて臨床心理士の先生に子育て関係のお話会を開催しましたが大好評でした。12月にはクリスマス会も開催し、赤ちゃんを連れて楽しんでもらえました。堅苦しい相談会ではなく、ワイワイガヤガヤと和やかに子育てが少しでも楽しめるよう願って開催しています。自由にご参加ください。

2024年度笑顔あふれるコープしが基金採択団体

ははこ

●代表／東 直美
●設立／2024年（東 直美代表としての「ははこ」の設立年）

地域活性

世代を超えた繋がりの創出

NPO法人 一隅クラブは、2024年に比叡山高校サッカー部を中心にOBや保護者の皆さんがサポートし、地域の皆さんの協力のもと発足し、150名ほどのメンバーで活動されておられます。

一隅クラブの方針として、サッカーの技術向上はもちろんですが、人間的に成長していくための経験を蓄積してほしいとの思いから、「+ONE事業」としての活動を企画実施されています。

具体的には、これまで高校生の部員たちが指導に参加する地域のサッカースクールの開催などに取り組んでこられましたが、2024年は、10代のアスリートにとって大切な体作りとして、食育に力をいれることとし、地域との連携の中で考える取り組みとして、米作りの農業体験に参加。この農業体験は、淡海ネットワークセンターが主催する人材育成事業の「おうみ未来塾17期生 たなぼた家」と「伊香立まちづくり協議会」との事業で、1年生部員27名が参加しました。先生方は、「栄養面だけでなく食事の大切さ」、「手間をかけ愛情をもって生産してくださる人がいること」、「地域とのつながりが大事なこと」などを生徒たちに知ってもらいたいと考えておられました。生徒にとっては「たなぼた家」さんや、まち協の皆さんなど大人と一緒に作業する事で大きな学びがあったようです。実際に生徒たちから、「学校生活では接することの少ない年配の方や子どもたちとの交流方法など、どうすれば楽しい時間を過ごせるかを工夫しました。」との声を聞きました。

また「指示を受けるのではなく自ら動くことができるようになり、チームプレーが大切なサッカーにも良い影響が出ています。」と、笑顔で話してくれた生徒たち。今回は、農業体験を通しての地域交流でしたが、今後も様々な「+ONE事業」を企画されているようです。サッカーだけでなく生徒たちの体験を通して地域貢献へとつなぐNPO法人 一隅クラブさんでした。

特定非営利活動法人HIEIZAN
sports＆culture club ICHIGU 一隅クラブ

●設立／2023年　●統括責任者／渋江享一
●Instagram　@hieizan.s.c.c.i

地域貢献

子どもたちの笑顔が見たい一心で

今回お話を伺ったのはボランティア団体、布絵本「さえずり」さんです。さえずりさんは、1981年滋賀県で開催された「全国身障者スポーツ大会」の手作り土産を製作するボランティアに参加し、翌年には布絵本を製作する団体として活動をスタートされ、今年で活動43周年を迎えられます。

長い活動の間には、神戸や東日本の大震災で被災した子どもたちへ学校給食用の給食袋等を寄贈され、こまやかな心遣いが大変喜ばれたそうです。また地域の保育園や、障がい者施設等にも希望に応じた寄贈を毎年続けておられます。

また成安造形大学近江学研究所が2013年に製作した「仰木ふるさとカルタ」（3年にわたる仰木地域の方への聞き取りで製作）に、さえずりのみなさんが感銘を受け、布カルタとして忠実に再現され、その素晴らしい作品に今度は成安造形大学近江学研究所の方たちが感動されたお話しも伺いました。

ここ数年のコロナ禍での行動制限で、出張読み聞かせ会などの活動を進めていくのが困難な中、それでも活動を続けてこられた原動力は、「布絵本など作品を手に取ってくださり、楽しんでくださった方たちの笑顔や歓声です。」と、お話しくださり、この長年のボランティア活動に対し、2023年に厚労大臣表彰を受賞されました。

そして今年も、初期から受け継がれている「丁寧できれいな手仕事」をモットーに製作を続けていかれる予定で、新作布絵本の構想も進んでおられるようです。

現在作品数は150を超え、この中には今は活動されていない先輩方の作品もたくさんあります。これら思いのこもった作品たちが、地域の皆さん、とりわけ子どもたちへこれからも引き継がれ、たくさんの笑顔の花が咲くといいですね。

温かいお話をたくさんいただき、大変素敵な時間を過ごした取材でした。

メンバーは随時募集中！ 下記までお電話ください

ボランティア団体 布絵本「さえずり」

●設立／1982年6月　●代表／河北洋子
●活動拠点／長寿社会福祉センター077-567-3924

Challenge

未来塾17期生の

虫の目・鳥の目・魚の目

「地域プロデューサーが育つ塾」おうみ未来塾は、17期より卒塾生を中心とした運営体制になりました。その17期生22名が、昨年12月に卒塾されました。

今回は、運営委員長である藤田知丈さんに17期のふりかえり、そして18期生の新規募集に向けてメッセージをいただきました。

地域プロデューサーが育った！おうみ未来塾

「おうみ未来塾は、『地域プロデューサーを育てる』のではなく、『地域プロデューサーが育つ』塾です。」…運営委員として、私は17期生の入塾式の日にそう宣言し、常に“自ら学び、育つ姿勢”で塾生活動に臨む意欲と覚悟をもってもらうよう、塾生の皆さんに求めました。

それから1年3ヶ月。つかず離れず見守り続けるのは、もどかしくもあり、悩ましくもありましたが、卒塾日の活動成果報告会では、4つのグループが、それぞれにぶつかった課題をしっかり乗り越え、それぞれの個性・思い・強みを活かした創造的な活動を見事に形にしていった様子を聞くことができ、想像を越えて逞しく育ってくださったことに胸が熱くなりました。

卒塾式後の打ち上げの席で、塾生の一人から「活動中、トラブルがあってもグループメンバーみんなで助け合って解決できた。結果的に運営委員の力を借りることはあまりなかったけど、いざとなれば頼れる先輩がいてくださるだけで安心して活動に邁進できた」と聞いて、この方向性で間違ってなかったんだと安堵しました。

今年5月から、おうみ未来塾18期生の新規募集が始まる予定です。卒塾したての17期生も含め、県内外で地域プロデューサーとして活躍する大勢のおうみ未来塾生ネットワークに仲間入りしたいと思った人！あなたの入塾をお待ちしています♪

おうみ未来塾のホームページ

未来塾や塾生募集について、詳しくはホームページをご覧ください。
https://ohmi-net.com/ohmi_miraijyuku/

Spring Information

市民活動を応援する淡海ネットワークセンターの事業をご紹介します。

イベント 2024年度未来ファンドおうみ助成事業成果発表会を開催します。

【日時】2025年5月10日(土)午後　13:00～17:00(予定)
【会場】滋賀県立県民交流センター 305会議室(ピアザ淡海3階)

■びわこ市民活動応援基金(地域活性化事業)

団体名	事業名
チームエンパワーメント	インクルーシブシネマ ～障がい児、家族で映画館に行こう!～
ういんどあんさんぶる樂楽	身近な場で吹奏楽を聴いて・参加して楽しむ機会を創出!
特定非営利活動法人琵琶故知新	地理情報システムを活用した琵琶湖環境保全活動の見える化

■びわ湖の日基金

団体名	事業名
神田山を守り育てる会	里山神田山をみんなの力で魅力ある地域資産として守り育てる事業

■積水化成品基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人甲賀の環境・里山元気会	皆んなで楽しもう!里山元気会20周年記念『音楽祭』

■笑顔あふれるコープしが基金

団体名	事業名
びわこ環境サークル	未来の自然エネルギーの燃料電池、温度差発電、振動発電を体験しよう!
ははこ	ママが笑って子育てサポート
子どものノリシロ	ヒゲじいの親子でワクワク自然とあそぼう!

■ナカザワNEOフレンドシップ基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人 米原市多文化共生協会	みんなが集まる「みんなの食堂・みんなの農業」

■げんさん食育NPO基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人NPO子どもネットワークセンター天気村	食育から共育ちでつくる「仲間づくり」と「ふるさとづくり」

■湖国文学活動応援むらさき基金

団体名	事業名
鳰の会	日野俳句を次世代に伝え、日野の活性化につなげたい
風のかけたる	聞き書きでつなぐ山中町の過去・現在・未来

■びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金①

団体名	事業名
木たまご東近江	滋賀県内産の未利用木材を利用した木たまご玩具の展開

■びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金②

団体名	事業名
東近江市あらゆる場面で木を使う推進協議会	100年の森づくりビジョン　東近江市・あらゆる場面で木を使うプロジェクト

『びわ湖の日基金』へありがとうございました!～びわ湖チャリティー 100km歩行大会～

長浜豊公園からゴール地点の大津市おごと温泉観光公園までの約100kmを2日間で歩く「びわ湖チャリティー 100km歩行大会」。参加された方も多いのではないでしょうか。この大会は名前の通り、チャリティーを通して地域社会に貢献することを目的に始まり、回を重ねるごとに「びわ100」の名前は浸透していきました。しかし、県内外の多くのみなさんに愛された歩行大会も昨年10月、惜しまれながら第10回大会開催を最後に一旦その幕を閉じられました。開催日の二日間は雨や暑さの過酷な状況だったにもかかわらず、参加者742名、完歩 582名で完歩率は過去最高の78.2%だったそうです!!

さて、大会の目的であるチャリティーの一環に、収益金を琵琶湖の環境保全団体等に寄付をすることを掲げておられますが、淡海ネットワークセンターの助成金事業、未来ファンドおうみ『びわ湖の日基金』にも第2回目からご寄付を続けていただき、『びわ湖の日基金』採択団体さんのチャレンジへ大きなご支援を賜りました。実際に成果発表会に実行委員長様が足を運んでくださり、採択団体さんから直接活動の成果を聞いていただく事もあり、このつながりが消えてしまうのはとても残念ですが、採択された団体さんの活動は続いていますし、また「びわ湖チャリティー 100km歩行大会」の琵琶湖への想いは『びわ湖の日基金』を通して受け継いでいきたいと思います。

改めて、びわ湖チャリティー 100km歩行大会の実行委員会様はじめ参加者の皆さま、大会にかかわられた多くの皆さまに心よりお礼申し上げます。長きに渡り本当にありがとうございました!

淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

発行日／ 2025年3月1日　発行所／公益財団法人 淡海文化振興財団
〒520-0801　大津市におの浜1-1-20　ピアザ淡海2階
TEL:077-524-8440　FAX:077-524-8442
https://www.ohmi-net.com　E-mail:office@ohmi-net.com
開館日:市民活動ふらっとルーム／火～土曜日(火～金曜日の祝日は休館)
事務所／火～日曜日

Facebook　Instagram

公益財団法人 関西みらい銀行緑と水の基金

滋賀県内において、緑化推進や水環境保全に取り組まれている自治会や住民グループなど地域団体の皆様の活動に対し、助成申請をいただいた事業の書類審査を行い、最大30万円までの助成を行います。　詳しくは、ホームページをご覧ください。

〒520-0043 滋賀県大津市中央四丁目5番12号(TEL:077-521-1545)　ホームページ https://www.gw-kikin.or.jp/

VEGETABLE OIL INK　この印刷物は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。